

琉球大学学術リポジトリ

琉球諸語に活用型形容詞は存在するか? :
伊良部島方言の場合

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学国際沖縄研究所 公開日: 2016-05-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 下地, 理則, Shimoji, Michinori メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/33967

琉球諸語に活用型形容詞は存在するか？ ——伊良部島方言の場合——

下 地 理 則*

Does the Inflecting Adjective Exist in Ryukyuan?: A Case Study of Irabu

SHIMOJI Michinori

This study discusses the word class assignment of property-concept words (PC words) in Irabu Ryukyuan, with a particular focus on whether an inflecting word form containing a PC root is regarded as an adjective. My conclusion is that the inflecting PC word is nothing but a verb, with the word-internal morpheme *-kaR* being analyzed as a class-changing derivational affix or verbalizer affix. That is, unlike the previous assumption that *-kaR* is a distinctive morpheme that characterizes adjectival conjugation, I demonstrate that this morpheme belongs to a stem, and this stem is a verbal stem.

1. はじめに

本稿では琉球語宮古伊良部島方言を対象に、ものの性質や状態 (Property Concept, Thompson 1988) を表す「形容詞的な語」(Property Concept word, 以下 PC word) が品詞的にどう振る舞うか、という類型論的な問題を考察する。

伊良部島方言の形容詞の認定についてはすでに拙稿 (Shimoji 2009) で一定の結論を示したが、そこでは以下の2点を主張した。① これまでの琉球語学で二次的な形容詞の形式だと考えられてきた重複語形のみを形容詞と認め、② 逆に形容詞の典型とされてきた「活用型形容詞」(琉球諸語全般でいえばサアリ・クアリ型で活用する語形) を動詞として分析するというものであった。Shimoji (2009) では主に①に焦点を当てて議論したが、本稿では②に焦点を当て、なぜ「活用型形容詞」が動詞として分類すべきなのかについて考察してみたい。

* 群馬県立女子大学講師 Lecturer, Gunma Prefectural Women's University

2. 言語類型論的に見た PC word の品詞的振る舞い

通言語的に見た場合、動詞と名詞は明確に区別できることが多いとされる (Schachter 1985, Givón 1984, Croft 2003, Payne 1997, Dixon 2004)。

(1) 動詞

典型的に動作を表す語は述語として機能し、語の内部でテンス・アスペクト・モード (TAM) の標示を担う。あるいは、統語的に TAM マーカーと述語句を形成する。これをふつう、動詞という品詞に分類する。同じ振る舞いをする語の中には、より静的な状態を表すような語もある。例えば日本語の「殴る」と「いる」はともに動詞である。

(2) 名詞

典型的に物を表す語は項になる句のヘッドとして振る舞う。形態論的に性数格で屈折する場合もある。これをふつう、名詞という品詞に分類する。同じ振る舞いをする語の中には、抽象的な概念を表したり、動作を表したりする語もある。日本語における「頭」と「動作」はともに名詞である。

一方、Property Concept を表す語は扱いが難しい。ここで Property Concept とは、典型的には以下のような意味領域をカバーする概念であるとしておく (Dixon 1982)。

表1 Property Concept に含まれるもの (Dixon 1982 より)

DIMENSION	'big'	'long'	'tall'	'wide'
AGE	'new'	'young'	'old'	'old'
VALUE	'good'	'bad'	'lovely'	'odd'
COLOUR	'black'	'white'	'red'	'blue'
PHYSICAL PROPERTY	'hard'	'heavy'	'strong'	'hot'
HUMAN PROPENSITY	'mean'	'happy'	'clever'	'ashamed'
SPEED	'fast'	'slow'		

いろいろな言語において、PC word は一方で名詞と、他方で動詞と共通点を持ち、したがっていずれかの品詞の下位クラスなのか独自の品詞なのかが分かりにくいことがある。これは PC word の意味・機能的な特徴から来るものであると言われる。意味的に、例えば Givón (1984) の言う time-stability continuum の中で名詞 (恒常性を持った実在) と動詞 (変動性を持った動作) の中間であると言われることがある。機能的に、名詞を限定

修飾して談話に導入する機能は名詞的であり、他方で主語を描写する陳述の機能を持っていることから動詞的である、ともいわれる (Thompson 1988)。

よって、PC word は、ある言語では動詞や名詞と明確に異なる品詞 (すなわち形容詞) として振る舞い、別の言語では動詞のサブクラスとして、さらに別の言語では名詞のサブクラスとして振る舞うことがある。

このように、PC word の品詞分類は一方で動詞と、他方で名詞との共通点・相違点に注意を払いながら行う必要があり、一筋縄ではいかない場合が多いと言える。形容詞をある言語で認定するかどうかは慎重な議論が必要である。よって、琉球諸語の研究においても、形容詞の認定に関する議論を行っておく必要がある。もちろん、歴史言語学的な議論で、便宜的に日本語の形容詞に対応する語形を「形容詞」と呼ぶことは問題ないと言えるが、共時的な文法体系の記述を行う上では、日本語の形容詞に相当するからという理由で形容詞を立てることは適切ではない。

なお、共時的な形容詞の認定の際、特に意味・形態・統語のどの面に注目して品詞を分類しているかに注意しなければならないだろう。Property Concept を表す語は総じて形容詞である、とする立場は意味レベル (ないし語彙素レベル) で形容詞を定義している。この場合、Property Concept についての厳密な定義がなされなければ形容詞の定義は限りなく広いものとなる (例えば、「高い」と「高さ」はいずれも Property Concept を表しているとすれば、これらはともに「形容詞」となる)。一方、形容詞に独特の形態論的特徴があれば、明確な定義が可能である。例えば英語の (一部の) 形容詞は比較級の形式を持つという形態論的特徴で他品詞と区別できる。日本語の形容詞には「-い」という活用語尾があり、これが他品詞 (特に動詞) と区別する際に有力な基準となる (Backhouse 2004)。統語論的な基準として最も一般的な基準は、名詞修飾の位置に立てるというものである。このような統語的基準は、形態論が豊かでない言語の場合に形容詞を定義する際重要な決め手となる。なお後述するように、伊良部方言では形態論・統語論の両面で明確に形容詞を定義することができる。

3. PC word の品詞的な振る舞い——宮古伊良部島方言

伊良部島方言では、形態論的に見ても統語論的に見ても、名詞・動詞のほかにも形容詞を認める必要がある (Shimoji 2009)。

まず形態論的な観点から形容詞を見ると、長音化を伴う完全重複という独特な形態構造を持っている。以下の表に見るように、完全重複は動詞語根の重複 (出力語形は副詞に分類、Shimoji 2008a: 37-38) もあるが、重複語根末の長音化を伴わない点で、PC 語根の重複 (出力語形は形容詞) と区別される。

表 2 完全重複

PC 語根 (入力) → 形容詞 (出力)			動词语根 (入力) → 副詞 (出力)		
<i>taka</i> 'high'	→	<i>takaa + taka</i> 'high'	<i>as</i> 'do'	→	<i>as + as</i> 'doing'
<i>pjaa</i> 'fast'	→	<i>pjaaa + pjaa</i> 'fast'	<i>mii</i> 'look'	→	<i>mii + mii</i> 'staring'
<i>zau</i> 'good'	→	<i>zauu + zau</i> 'good'	<i>fa(u)</i> 'eat'	→	<i>fau + fau</i> 'eating'
<i>kiban</i> 'poor'	→	<i>kibann + kiban</i> 'poor'	<i>nak</i> 'cry'	→	<i>nac + nac</i> 'crying'

次に、統語的な観点から形容詞を見ると、形容詞は名詞句の主要部にも動詞句の主動詞のスロットにも立つというハイブリッドとしての性格を持っている点で独特である（詳しくは Shimoji 2009 参照）。

(3) 名詞句の主要部 (コンピュータをとり、名詞述語として機能)

a. *unu pžtu = u [sinsii] = du a-tar.*
 その 人 = TOP 先生 = FOC COP-PST
 「その人は先生だった。」【名詞】

b. *unu pžtu = u [bakaa + baka] = du a-tar.*
 その 人 = TOP RED + 若い = FOC COP-PST
 「その人は若かった。」【形容詞】

(4) 名詞句の主要部 (属格をとり、上位の名詞句の修飾部として機能)

a. *[irav] = nu pžtu = tu [pžsara] = nu pžtu*
 伊良部 = GEN 人 = ASC 平良 = GEN 人
 「伊良部の人と平良の人」【名詞】

b. *[ujakii + ujaki] = nu pžtu = tu [kibann + kiban] = nu pžtu*
 RED + 豊か = GEN 人 = ASC RED + 貧しい = GEN 人
 「豊かな人と貧しい人」【形容詞】

(5) 動詞句の主動詞

a. *cc = nu [tir-i-i] = du u-tar.*
 月 = NOM 照る -THM-CVB.SEQ = FOC PROG-PST
 主動詞 補助動詞
 「月が照っていた。」【動詞】

b. *cc = nu [akaa + aka] = du u-tar.*
 月 = NOM RED + 明るい = FOC PROG-PST
 主動詞 補助動詞
 「月が明るくしていた。(lit. 月が明々っていた)」【形容詞】

なお、形容詞は (4b) のように名詞を修飾する位置で生じることがほとんどであり、通

言語的に見て典型的な形容詞の例であると言える。

以上の2点から、伊良部島方言において名詞・動詞と明確に異なる形容詞という品詞を認めることができる。

4. PC 語根から形成されるその他の語形

伊良部島方言の特筆すべき点は、任意の PC 語根から5つの PC word が形成できるという点である。それらは①複合名詞、②準複合名詞、③形容詞、④動詞、⑤副詞である。PC word が名詞・動詞・形容詞・副詞という4品詞にまたがっていることが分かる。これは類型論的にもきわめて珍しい(詳しくは Shimoji 2009 を参照)。

- (6) *taka + gii*
高い+木
「高い木」【複合名詞】
- (7) *taka + munu*
高い+ MUNU
「高い(もの)」【準複合名詞; munu は実詞としての意味を失いつつある】
- (8) *takaa + taka*
RED+ 高い
「高い」【形容詞】
- (9) *taka-ka-tar.*
高い-KAR-PST
「高かった」【動詞、-kaR については次節で詳述】
- (10) *taka-f*
高い-ALZ
「高く」【副詞】

詳細は Shimoji (2008b) に譲るが、ここで5つの PC word の機能的な相違点を簡潔に述べておきたい。まず、PC word の機能を、事物指示の機能・名詞修飾の機能・陳述の機能に分けることができる (Croft 2003 のいう *reference, modification, predication* に相当する)。

PC word が複合名詞の場合、それ自体は指示の機能を持っているといえるが、内部要素の PC 語根は名詞語根を修飾する機能を持っている。なお、伊良部島方言における複合名詞の生産性はきわめて高く、任意の PC 語根が任意の名詞語根と複合し、その名詞語根を語の内部で修飾することができる。

- (11) 複合名詞

琉球諸語に活用型形容詞は存在するか？

<i>taka-pžtu</i>	<i>taka-gii</i>	<i>taka-dukuma</i>	<i>taka-jaa</i>
高い-人	高い-木	高い-ところ	高い-家
「背が高い人」	「高い木」	「高いところ」	「高い家」

複合名詞としての PC word の典型的な使用領域は、「あの人は背の高い人だ」のようなコンピュータ文であり、具体的な指示対象を持っているというよりも集合を示すような (non-referential な) 指示をする。「背の高い人がそこにいる」や「その背の高い人はどうなった？」などのような意味を表す場合は、後述する動詞の語形を使う ((14) 参照)。

PC word が準複合名詞の場合、形式名詞語根の *munu* が「もの」という意味を失いつつあり、指示の機能を持たない場合が多い。むしろ、名詞述語位置で主語の状態や性質を示す陳述の機能を果たす。

(12) 準複合名詞

<i>kjuu = ja</i>	<i>daižna</i>	<i>[ac + munu]</i> .
今日 = TOP	たいへんな	暑い + MUNU
「今日はとても暑い。」		

準複合名詞の *munu* は形態論的には名詞語根としての性質を残している。よって、準複合名詞全体は名詞であり、上の例のように連体詞による修飾を受けることができる。しかし意味の点では、「もの」という名詞的な意味はない。

PC word が形容詞の場合、名詞句の中に生じて主要部名詞を修飾する。

(13) 形容詞

<i>[takaa-taka] = nu</i>	<i>pžtu</i>
RED-高い = GEN	人
「背が高い人」	

形容詞の典型的な使用領域は、「昔々、背の高い人がいた。」などのように具体的な指示対象を持った (referential な) 名詞を談話に初めて導入する場合である。

一方、すでに談話に導入済みの名詞を修飾する場合は関係節を使う。その述語となるのが *-kaR* を取る動詞としての PC word である。

(14) 動詞

<i>unu</i>	<i>[taka-kar-Ø]</i>	<i>pžtu = u</i>	<i>nnama = a</i>	<i>mii-n-Ø = ni.</i>
その	高い-KAR-NPST	人 = TOP	今 = TOP	見る-NEG-NPST = ね
「その背が高い人は最近は見ないね。」				

また、Koloskova and Ohori (2008) が宮古平良方言について指摘しているように、この動詞語形は焦点標識が現れた際に使われる。(14) のような場合と合わせて考えれば、動詞語形は談話における前提 (presupposition) を表していると言える。

副詞の PC word は付加的に動詞を修飾したり、あるいは特定の構文では動詞の取る補部として義務的に使われる。後者の例を以下にあげる。

(15) 副詞

[taka-fj] = du nar-tar.
高い-ALZ = FOC なる-PST
「高くなった。」

5. 「活用型形容詞」の問題

琉球語学では、琉球諸語に総じて形容詞を認めている。重要な点は、本稿で動詞として分類する語形 (e.g. 前節の (9) や (14)) も形容詞と認めている点である (宮古については本永 1978、名嘉真 1992、狩俣 1992)。その根拠となるものは、動詞と異なる活用をするという形態論的な特徴である。北琉球と宮古を除く南琉球では、形容詞は「サアリ」系活用を行い、語形に *-saR* を含む (以下の (16) 参照)。一方、宮古では「クアリ」系活用を行い、語形に *-kaR* を含む (以下の (17))。

(16) *kjura-sa-i*

美しい-SAR-NPST
「美しい」【北琉球奄美湯湾方言】

(17) *kagi-kar-Ø*

美しい-KAR-NPST
「美しい」【南琉球宮古伊良部島方言】

これらを今、仮に「活用型形容詞」と呼ぼう。本稿では、活用型形容詞は動詞として分析する。ほとんどの琉球諸語では、活用型形容詞の活用語尾は動詞の活用語尾と同形である (伊良部島方言について表 3 を参照、北琉球奄美湯湾方言について Niinaga *in. press.*, 南琉球八重山波照間方言について Aso *in. press.* も参照)。

表3 動詞と「活用型形容詞」の活用パラダイム (Shimoji 2009: 38)

	<i>tur-</i> 「取る」	<i>a(r)-</i> 「ある」	<i>taka-ka(r)-</i> 「高い」
定動詞 (m 語尾形過去)	<i>tur-tam</i>	<i>a-tam</i>	<i>taka-ka-tam</i>
定動詞 (基本形過去)	<i>tur-tar</i>	<i>a-tar</i>	<i>taka-ka-tar</i>
定動詞 (m 語尾形非過去)	<i>tur-m</i>	<i>a(r)-m</i>	<i>taka-ka(r)-m</i>
定動詞 (基本形非過去)	<i>tur-Ø</i>	<i>ar-Ø</i>	<i>taka-ka-Ø</i>
定動詞 (希求推量形意志)	<i>tur-a-di</i>	<i>ar-a-di</i>	<i>taka-ka-a-di</i>
定動詞 (希求推量形願望)	<i>tur-a-baa</i>	<i>ar-a-baa</i>	<i>taka-ka-a-baa</i>
定動詞 (希求推量形命令)	<i>tur-i</i>	<i>ar-i</i>	<i>taka-ka-i</i>
副動詞 (理由) 「—するので」	<i>tu(r)-iba</i>	<i>a(r)-iba</i>	<i>taka-ka(r)-iba</i>
副動詞 (条件) 「—したら」	<i>tur-tigaa</i>	<i>a-tigaa</i>	<i>taka-ka-tigaa</i>
副動詞 (否定条件) 「—しなければ」	<i>tur-a-dakaa</i>	<i>ar-a-dakaa</i>	<i>taka-ka-a-dakaa</i>
副動詞 (同時) 「—しながら」	<i>tur-ccjaaki</i>	N/A	N/A
副動詞 (目的) 「—しに」	<i>tur-ga</i>	N/A	N/A
副動詞 (即時) 「—するとすぐ」	<i>tur-tuu</i>	N/A	N/A
副動詞 (継起) 「—して」	<i>tur-i-i</i>	<i>ar-i-i</i>	<i>taka-ka-i-i</i>
副動詞 (中止) 「—せずに」	<i>tur-a-da</i>	<i>ar-a-da</i>	<i>taka-ka-a-da</i>

-kaR や -saR に後続する活用語尾が動詞と、とくに状態動詞「ある」と同一である事実は通時的には -kaR や -saR が *ku ari や *sa ari というふうに状態動詞 *ari を内包していたことから当然予測される事実である。琉球語学の伝統的な立場によれば、形容詞は -saR ないし -kaR の存在によって動詞と区別される。

- (18) a. 動詞:活用語尾
 b. 活用型形容詞:-saR/-kaR-活用語尾

この分析は一見、説得的であるが、慎重に分析すると多くの問題をはらんでいることに気づく。まず、ある語形に特別な接辞 ((18b) の -saR/-kaR) が含まれていればそれは別品詞である、とする議論は、形態論を単純に見すぎている。以下のような例を考えてみよう。英語の名詞語幹形成に関して、動詞語幹から名詞語幹を派生させる -er という接辞は非常に生産性が高く、さまざまな動詞語幹につく。たとえば walk-er や play-er は名詞語幹として、名詞の屈折カテゴリーである数で屈折する。

- (19) a. [pen]-s, [paper]-s
 b. [walk-er]-s, [play-er]-s

(19a) も (19b) も同じ屈折をしているが、(19b) の語形が *-er* を余分に含んでいるためにこれらを別品詞だとする議論は成り立たない。*-er* は名詞語幹を形成する派生接辞であるから、(19a, b) とともに [名詞語幹] *-s* という全く同じ形態構造を持っていると分析すべきである。言い換えれば、語幹の内部構造の違いは、語形の品詞の違いに結びつかない。(19a) と (19b) の語形を別品詞だと考えるような (誤った) 議論では、派生接辞である *-er* も屈折接辞である *-s* も等列に考えられていて、いわば平坦な形態論的構造を持っているとみなしている。しかし実際は形態論は階層構造を持っており、語幹の内部というレベルでは異なった構造を持っていても、語形というより上位のレベルでは同じ構造を持っているということが起こりうる。

さて、ここで再び琉球諸語の活用型形容詞の問題に立ち返ってみたい。ここで問題となるのは *-saR* および *-kaR* の形態論的位置づけである。可能性は2つある。まず、以下の (20) に見るように、*-saR/-kaR* が語幹の外側にあるというものである。つまり、形容詞だけに見られる屈折接辞として機能しているという場合である。この場合、屈折カテゴリーが異なるのだから、動詞とは別品詞だとみてもよさそうである。

- (20) a. 動詞: []-活用語尾
 b. 活用型形容詞: []-*saR/-kaR*-活用語尾

一方、もうひとつの可能性は、以下の (21) に示すように、*-saR/-kaR* が語幹の内部にある場合である。このような場合、すでにみた英語の *-er* の例と同様、*-saR/-kaR* が余分に存在しているからといって品詞の違いをもたらす要素ではないと言える。後続する活用語尾が動詞と同じなのだから、*-saR/-kaR* は動詞語幹を派生している派生接辞であり、形態構造はともに [動詞語幹]-活用語尾にほかならない。

- (21) a. 動詞: []-活用語尾
 b. 活用型形容詞: []-*saR/-kaR*-活用語尾

結論から言って、少なくとも伊良部島方言においては (21) のような分析が正しい。(20) のような構造を否定する証拠は以下の例で十分である。すなわち、動詞の派生接辞である使役の接辞が *-kaR* に後続可能である。

- (22) *ssu-kar-as-tar*.
 白い-KAR-CAUS-PST
 「白くした」【PC 語根 + *-kaR* + 使役 + 活用語尾】
- (23) *patarak-as-tar*.
 働く-CAUS-PST
 「働かせた。」【動詞語根 + 使役 + 活用語尾】

もし *-kaR* が (20) に示したように語幹の外側にあるなら、動詞の派生接辞をさらにとるということは考えられない。一方、もし *-kaR* が動詞語幹を形成する派生接辞 (verbalizer) であると考えれば、(22) も (23) も全く同じ原理で説明できる。すなわち、これらはいずれも以下のような [動詞語幹]-動詞派生接辞-活用語尾という構造を持っていると考えることができる。

- (24) [*ssu-kar*]-*as-tar*.
白い-VLZ-CAUS-PST
「白くした」
- (25) [*patarak*]-*as-tar*.
働く-CAUS-PST
「働かせた。」

以上の議論から、活用型形容詞を動詞と別品詞であるとする共時的分析は妥当性を欠く。当該形式はあくまで動詞のサブクラスとして分類するべきである。

6. まとめ

本稿では、伊良部島方言の PC word の品詞分類のうち、特に動詞との区別に関して、伝統的な琉球語学の分析との相違を示した。すなわち、「活用型形容詞」を形容詞として認定する妥当性はなく、動詞の下位分類とすべきであるという結論を示した。この分析は、「サアリ」「クアリ」系活用の中核をなす形態素 *-saR/-kaR* の形態論的な位置づけを慎重に行うことから導かれるものである。これらの形態素は動詞語幹を形成する派生接辞であり、形容詞の独特な活用語尾ではない。

参考文献

- Aso, Reiko. in. press. Hateruma. In Shimoji, Michinori, and Thomas Pellard, eds., *An introduction to Ryukyuan languages*, 189–227, Tokyo: ILCAA.
- Backhouse, A. E. (2004) Inflected and uninflected adjectives in Japanese. In Dixon and Aikhenvald, eds., 50–73.
- Croft, William. (2003) *Typology and Universals* (2nd edition). Cambridge: CUP.
- Dixon, R.M.W. (1982) *Where have all the adjectives gone? and other essays in semantics and syntax*. Berlin: Mouton.
- Dixon, R.M.W. (2004) Adjective classes in typological perspective. In Dixon, R.M.W., and Alexandra Y. Aikhenvald, eds., *Adjective classes*, 1–49, Cambridge: Cambridge University Press.
- Givón, Talmy. (1984) *Syntax. A functional-typological introduction* (1). Amsterdam; Philadelphia: John Benjamins.
- 狩俣繁久 (1992) 「宮古方言」『言語学大辞典 世界言語編』下-2: pp. 848–863、三省堂、東京。
- Koloskova, Yulia, and Toshio Ohori. (2008) Pragmatic factors in the development of a switch-adjective lan-

- guage: A case study of the Miyako-Hirara dialect of Ryukyuan. *Studies in Language* 32 (3): 610–636.
- 本永守靖 (1978) 「宮古平良方言の形容詞」井上史雄・篠崎晃一・小林隆・大西拓一郎編 (2001) 『琉球方言考』 (7: 先島)、pp. 388–396、ゆまに書房、東京。
- 本永守靖 (1982) 「伊良部方言の研究」井上史雄・篠崎晃一・小林隆・大西拓一郎編 (2001) 『琉球方言考』 (7: 先島)、pp. 650–669、ゆまに書房、東京。
- 名嘉真三成 (1992) 『琉球方言の古層』 第一書房、東京。
- Niinaga, Yuto. in. press. Yuwan. In Shimoji, Michinori, and Thomas Pellard, eds., *An introduction to Ryukyuan languages*, 35–88, Tokyo: ILCAA.
- Payne, Thomas E. (1997). *Describing morphosyntax*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Schachter, Paul. (1985). Parts-of-speech systems. In Shopen, Timothy, ed., *Language typology and syntactic description* (1), 3–61, Cambridge: CUP.
- Shimoji, Michinori. (2008a). Descriptive units and categories in Irabu. *Shigen* 4: 21–55.
- Shimoji, Michinori. (2008b). *A grammar of Irabu, a Southern Ryukyuan language*. Unpublished PhD thesis, the Australian National University.
- Shimoji, Michinori. (2009). The adjective class in Irabu Ryukyuan. *Studies in the Japanese Language* 5 (3): 22–40.
- Thompson, S. A. (1988). A discourse approach to the category “adjective”. In Hawkins, John, ed. *Explaining language universals*, 167–210, Oxford: Blackwell.